福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1156集

# 那　珂　61

── 第128次調査の報告 ──

| 遺跡名 | 遺跡略号 | 調査番号 |
|---|---|---|
| 那珂遺跡群第128次 | NAK-128 | １００７ |

２０１２

福岡市教育委員会

# 序

福岡市は古くから、大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が育まれ、今日に至っています。これらかけがえない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、必要に応じて発掘調査をおこなって、往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成22年度におこないました、那珂遺跡群第128次調査の内容について報告するものです。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、ご活用頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において、様々なご協力をいただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成24年３月16日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

―例　言―

・本書は福岡市教育委員会が、平成22年度に実施した那珂遺跡群第128次調査の報告である。調査は藏冨士寛が担当した。
・本書における方位は座標北（日本測地系）であり、遺構についてはSA（柵列）、SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（柱穴）、SR（木棺墓）、ST（甕棺墓）といった略号を使用している。
・本書の執筆、編集は藏冨士がおこなった。
・本書に関わる資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

# 目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　１．調査の経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 2

Ⅲ　調査の記録 …… 4
　１．調査の概要 …… 4
　２．遺構・遺物 …… 4
　（１）木棺墓・土杭墓 …… 4
　（２）甕棺墓 …… 8
　（３）柵列・溝 …… 12
　（４）掘立柱建物 …… 14

## 挿　図　目　次

図１　那珂遺跡群（1/5,000）…… 2
図２　周辺の調査（1/1,000）…… 3
図３　調査範囲（1/300）…… 3
図４　木棺墓・甕棺墓配置（1/60）…… 4
図５　那珂128・129次調査（1/100）…… 5
図６　木棺墓・土坑墓（1/60）…… 6
図７　甕棺墓1（1/30）…… 5
図８　甕棺墓2（1/30）…… 9
図９　甕棺1（1/12）…… 10
図10　甕棺2（1/6）…… 11
図11　溝023・026（1/60・1/3）…… 12
図12　柵列001・溝020（1/100・1/60・1/3）…… 13
図13　掘立柱建物（1/60）…… 14

## 図　版　目　次

図版１　1　全景（北東から）　2　SD020（北から）
　3　SA001（北西から）　4　SA001（南西から）
　5　SD023（南西から）　6　SB028遺物出土状況（西から）
図版２　1　SR009（南東から）　2　SR008（北から）
　3　SR010（北東から）　4　SR011（北西から）
　5　SK019（東から）　6　SK027（南西から）
図版３　1　甕棺墓・木棺墓群（北東から）　2　小児棺群（東から）
　3　ST012（北から）　4　ST012（東から）
　5　ST028（西から）　6　ST004・021（北西から）
図版４　出土遺物

# Ⅰ　はじめに

## １．調査の経緯

平成22年３月26日、博多区東光寺町一丁目376－1における共同住宅建設に対し、埋蔵文化財の有無に対する照会がなされた。その場所は埋蔵文化財包蔵地内（那珂遺跡群）であることから、埋蔵文化財第１課では確認調査をおこない、現地表下40cm前後で遺跡の存在を確認した。

この結果を受けて、両者協議の結果、工事に対する遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という対応が採られることとなった。発掘調査は平成22年５月６日に開始し、隣接する129次調査と並行して調査を行ったため、木棺墓・甕棺墓群を確認した調査区北東側を残し、他の部分は６月初旬に埋め戻しを行っている。調査区北東側の調査終了は６月末。那珂129次調査の終了を待ち、埋め戻しを行った。７月には測量や土器の洗浄、および機材の撤収を行い、７月７日に全ての業務を終了した。調査にあたっては関係各位に多大なご協力を賜った。記して感謝したい。

## ２．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体　福岡市教育委員会

（１）平成22年度

| | | | |
|---|---|---|---|
| 事前審査 | 埋蔵文化財第１課 | 課長 | 濱石哲也 |
| | | 係長 | 宮井善朗 |
| | | 主任文化財主事 | 加藤良彦 |
| | | 事前審査係 | 木下博文・藏冨士寛 |
| 総　　括 | 埋蔵文化財第２課 | 課長 | 田中壽夫 |
| | | 調査第１係長 | 米倉秀紀 |
| 庶　　務 | 埋蔵文化財第１課 | 管理係 | 井上幸江　古賀とも子 |
| 担　　当 | 埋蔵文化財第２課 | 調査第１係 | 藏冨士寛 |

（２）平成23年度

| | | | |
|---|---|---|---|
| 総　　括 | 埋蔵文化財第２課 | 課長 | 田中壽夫 |
| | | 調査第１係長 | 米倉秀紀 |
| 庶　　務 | 埋蔵文化財第１課 | 管理係 | 井上幸江　古賀とも子 |
| 担　　当 | 埋蔵文化財第２課 | 調査第１係 | 藏冨士寛 |

整理作業　大石加代子　萩本恵子

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 遺跡調査番号 | 1007 | | 遺　跡　略　号 | | NAK128 |
| 地　　番 | 博多区東光寺町一丁目376-1 | | 分布地図記号 | | 37　東光寺 |
| 開　発　面　積 | 211.21㎡ | 調査対象面積 | 115.16㎡ | 調査面積 | 114.0㎡ |
| 調　査　期　間 | 2010.5.6～2010.7.7 | | | | |

# Ⅱ　位置と環境

福岡平野は、西は背振山塊から派生した長垂丘陵、東は犬鳴・三群山地によって画された地域の総称である。その内、飯倉丘陵の西側に位置し、室見川流域に広がる早良平野、月隈丘陵によって画され那珂川・御笠川流域に広がる狭義の福岡平野、多々良川・宇美川等によって形成された糟屋平野に細分できる。

那珂遺跡群は狭義の福岡平野中央部に位置し、那珂川と御笠川に挟まれた標高５～９ｍの洪積台地上に存在する。那珂遺跡群の北側には、鞍部を挟んで比恵遺跡群が存在し、遺構の分布状況を考えれば、一連の遺跡として認識することも可能である。両者を含めれば、その範囲は南北2.4km、東西１kmの広大なものとなる（図１）。那珂遺跡群には古く旧石器時代からの遺物も出土しているが、遺跡として本格的な展開を見せるのは弥生時代になってからであり、中期には台地の全体で集落が構成される。以後、古墳時代・奈良時代と遺跡の隆盛は続いている。

調査地点は那珂・比恵遺跡群の存在する丘陵のほぼ中央、那珂遺跡群内ではやや北寄りの位置にある。周囲では北側で36次調査、南東側で89・99次調査（吉武編2006）がそれぞれ実施されている（図２）。また南側では６世紀中頃の前方後円墳である東光寺剣塚古墳が存在しており、今次調査における遺構との関連も注目される。

**文献**

吉武 学 編2006「那珂41」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第887集　福岡市教育委員会

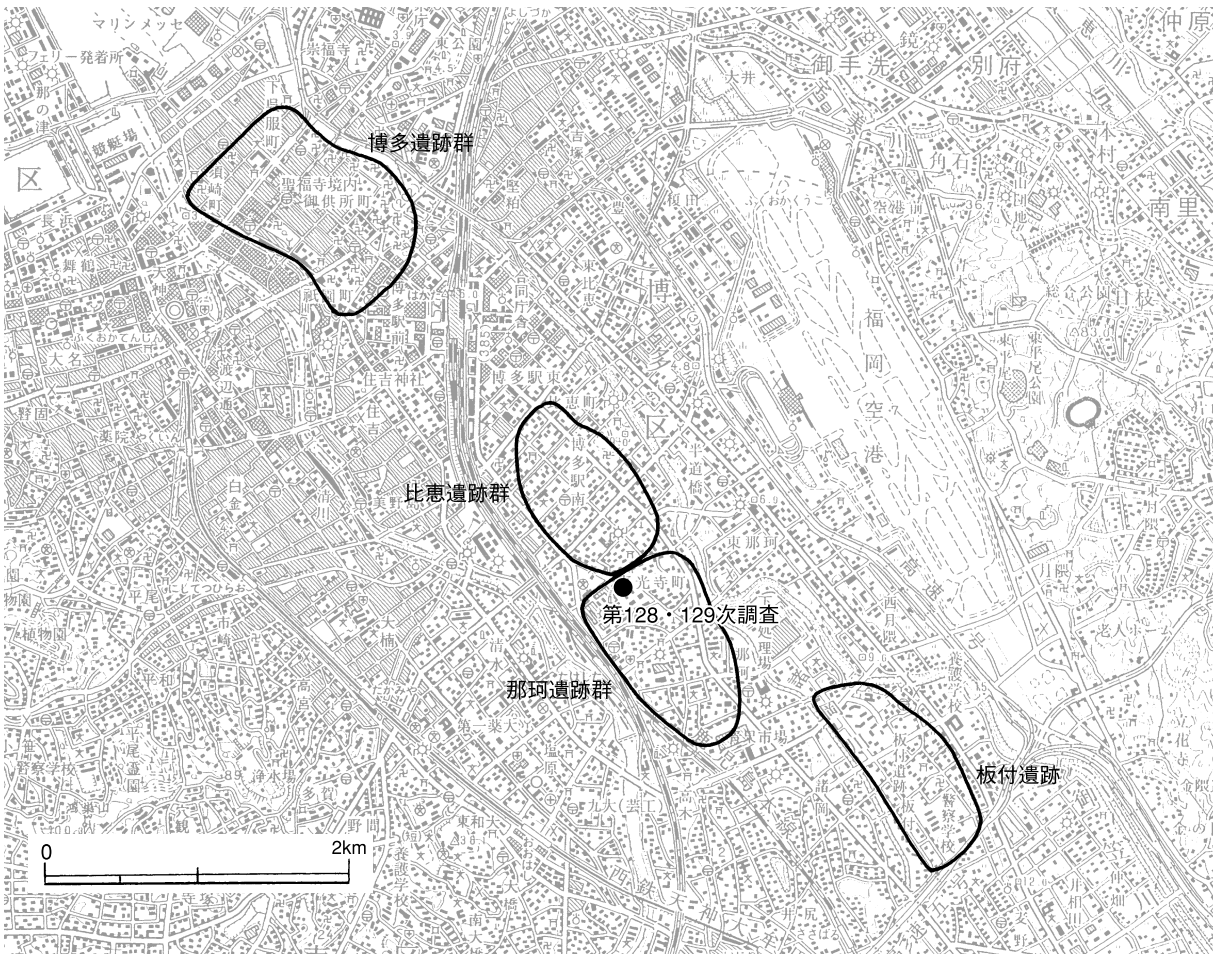
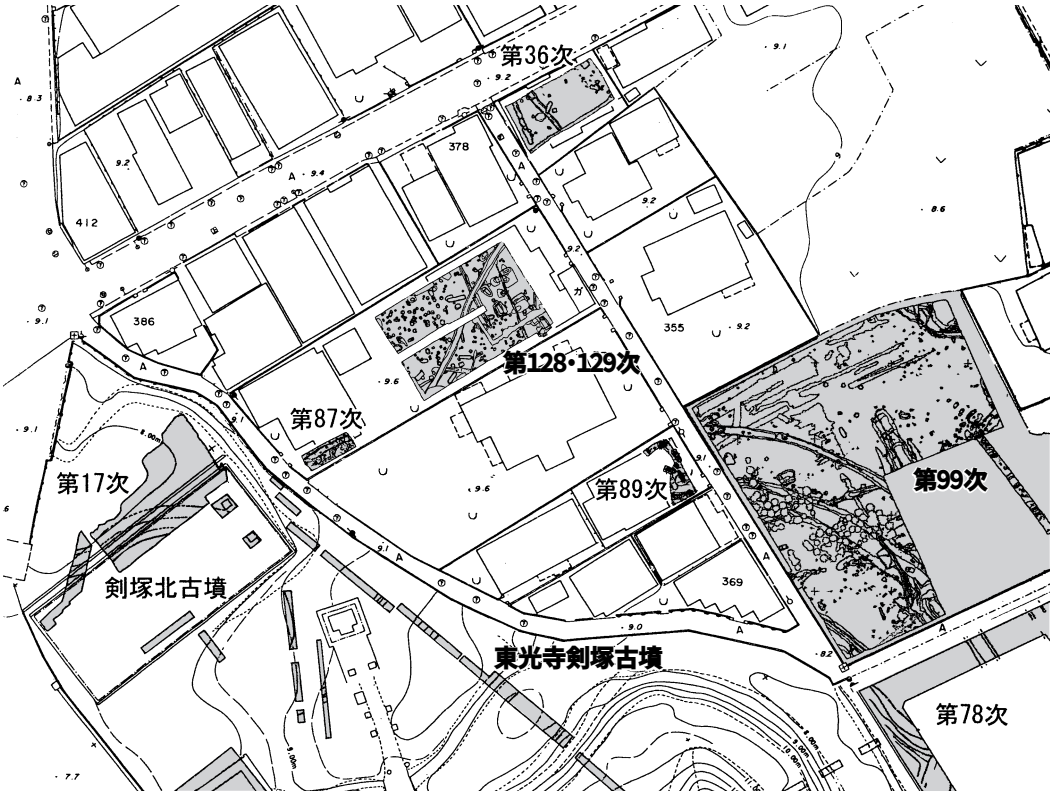



図１　那珂遺跡群（1/5,000）




※吉武編2006より作成

図２　周辺の調査（1/1,000）

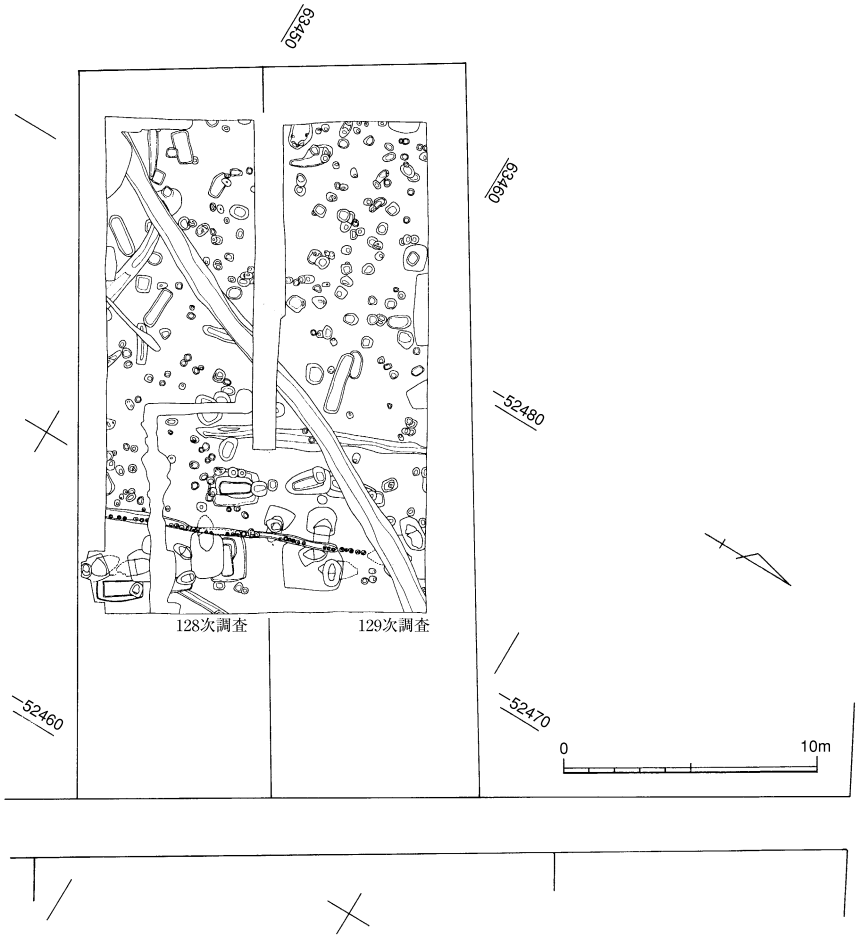



図３　調査範囲（1/300）

# Ⅲ　調査の記録

## １．遺跡の概要

今次調査は、表土下30～50cm、標高９m前後の鳥栖ローム上を遺構面とし、調査を開始した。確認した遺構には、墓、溝・柵列、掘立柱建物、ピット等がある（図５）。墓には木棺墓（４）、土坑墓（５）、甕棺墓（９）といった種類がある。以下ではそれぞれについて報告を行う。

なお、今次調査区は第129次調査（藏冨士編2012）に続いており（図５）、同じ担当者が実際に並行・継続して調査をおこなっている。溝等、同一の遺構が両次の調査区にまたがっている例もあり、甕棺墓群、土坑墓群などは双方の調査成果をふまえて検討すべきであると考える。したがって両調査区にまたがった遺構は重複を避けるためどちらか一方で報告をし、調査の総括は第129次調査報告においておこなうことにする。

藏冨士寛編2012『那珂62 ―第129次調査の記録―』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1157集　福岡市教育委員会

## ２．遺構・遺物

（１）木棺墓（SR）・土坑墓（SK）（図４・５）

木棺墓は調査区北東側に４基存在する。木棺の痕跡が確認できたのは、SR008・009のみであるが、形態上の類似性および配列の規則性から、SR010・011も木棺墓である可能性が高い。また、木棺墓群とは位置を違えて、調査区南西側では、平面長方形、もしくは長楕円形を呈する土坑がいくつか存在する（SK018・019・022・024・027）。後述するように、SK019からは刀子が出土し、土坑底面が平坦に仕上げられているものも存在していることから、これらは土坑墓である可能性を考えている。疑問点もあるが、以下では土坑墓とみなし報告する。

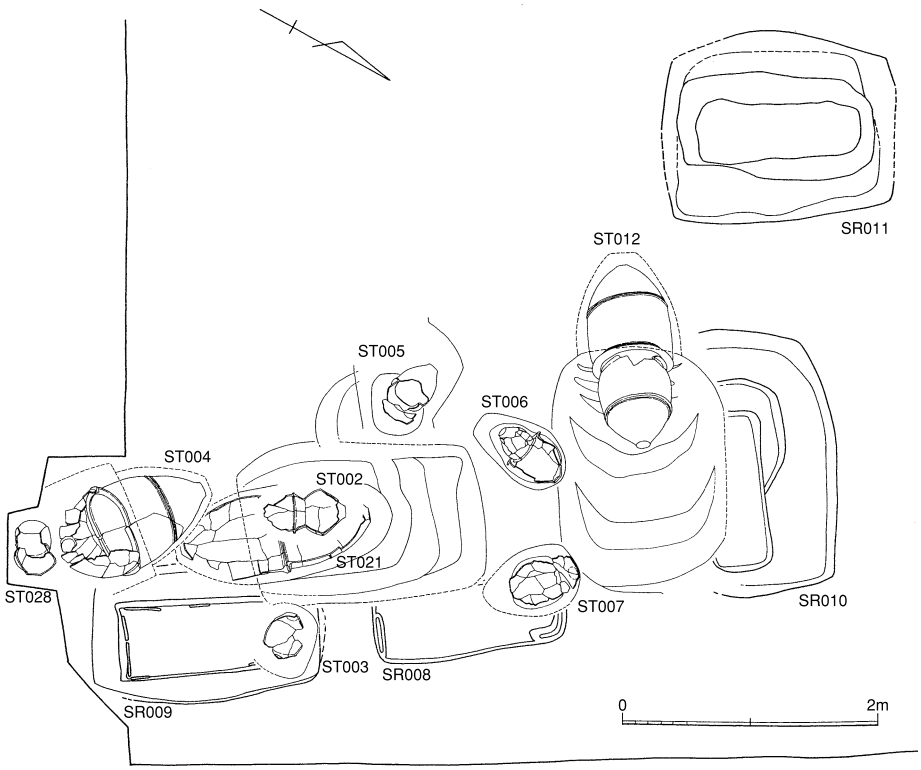



図４　木棺墓・甕棺墓配置（1/60）

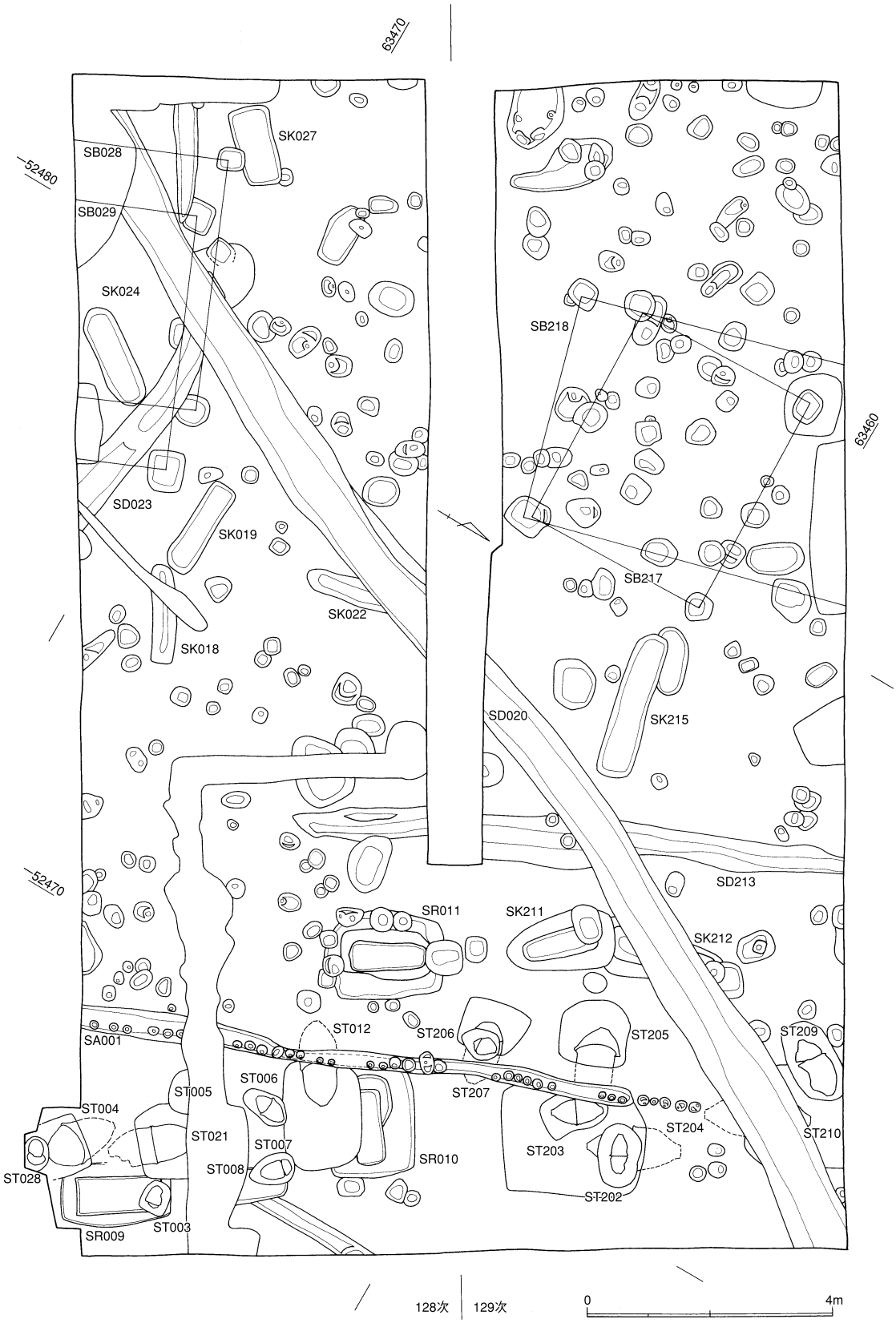



図５　那珂128・129次調査（1/100）

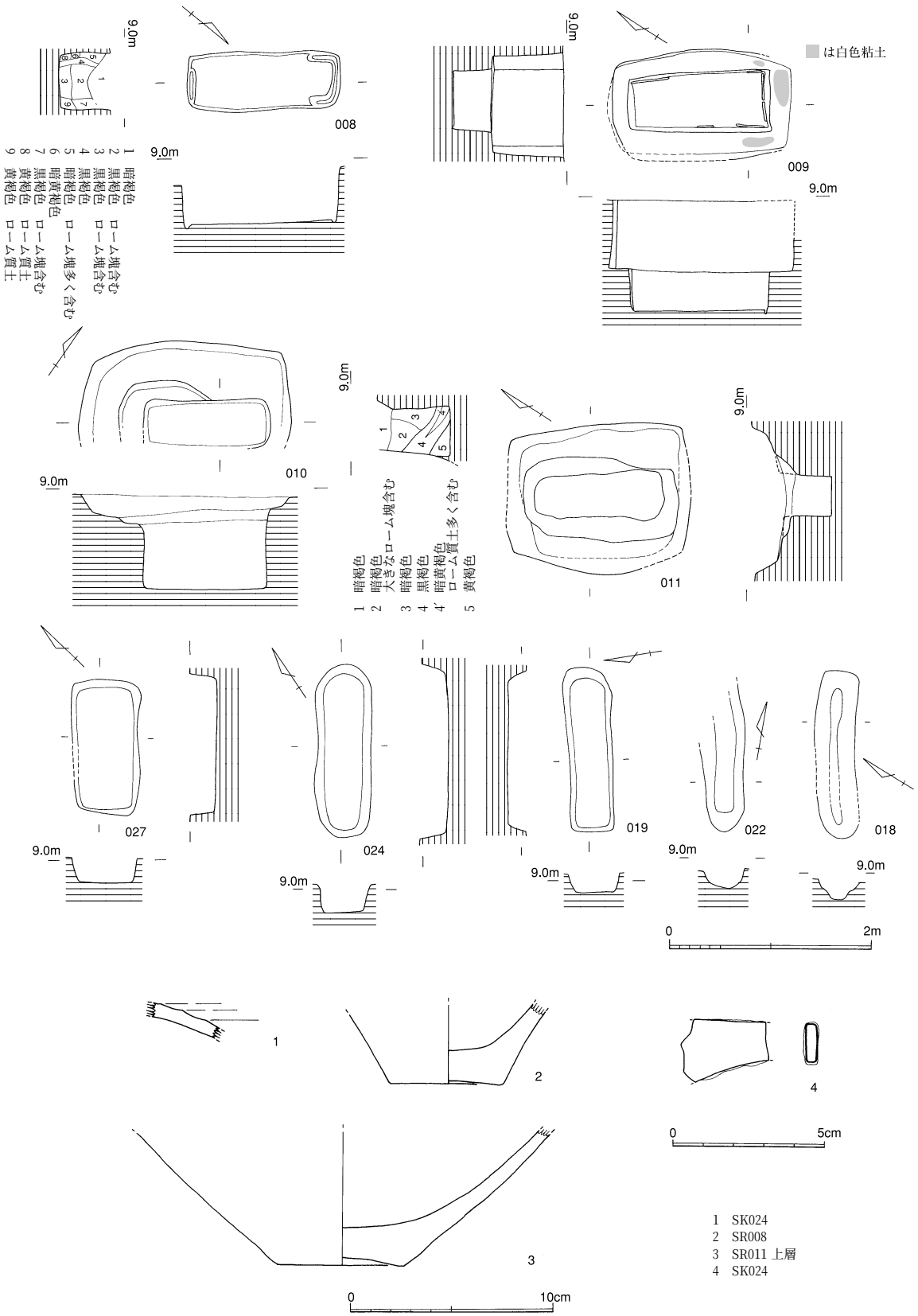



図６　木棺墓・土坑墓（1/60）

**SR008**　調査区北東側に位置する。墓坑は長さ152cm、幅60cmの平面長方形を呈する。深さは53cmで、各壁面の掘り込みは垂直である。底面の両小口部分には浅い溝状の落ち込みがあるが、木棺板材の痕跡であろう。それは土層断面でも確認できる。

**SR009**　SR008の南西側に近接して存在する。両者は軸線を同じくしており、強い関連性をみることができる。墓坑は２段掘りがなされており、壁面それぞれの掘り込みは垂直である。掘方は長さ177cm、幅85～110cmの平面長方形を呈し、深さは70cmを測る。主体部は長さ140cm、幅50～60cmの平面長方形を呈し、底面までの深さは37cm。主体部南側が若干幅広となっており、頭位はこちら側であろう。主体部南側短辺の掘方上面には、薄くではあるが白色粘土が広がっており、これは主体部を板材等で蓋をする際の目張りに使用されたものであろう。

また主体部底面には、部分的に壁際に沿って溝状の落ち込みを確認できる。これはSR008の場合と同様、木棺板材の痕跡と考えることができる。しかも南側短辺付近の状況をみれば、長側辺の板材で単側辺の板材を「H」形に挟み込む形態を採っていたことが解る。さらに南側短辺では２枚の板材を立てていたことが解るのだが、その痕跡は幅２cmと薄く、深さ５cm程の掘方はシャープで板材の形をはっきりと窺うことができた。少なくともこの部分は、板材を打ち込んでいたことが解る。このような痕跡は他ではみることができず、頭位に近いことが、特別な造作を選択させたのかもしれない。

**SR010**　SR008の北西側に位置し、SR008・009に対し、主軸を直交させる。墓坑の南東側をST012によって切り込まれている。墓坑は2段掘りがなされており、掘方は長さ210cm、幅150cm程の平面長方形を呈し、深さは20cmを測る。主体部は長さ125cm、幅45cm程の平面長方形を呈し、底面までの深さは63cm。主体部横断面の土層をみると、天井崩落に伴う自然堆積にしては不可解な南東側（ST012側）からの流入土があることに気付く。これがST012設置による破壊の際、流入したものであるとすれば、ST012を築くその時まで主体部内は空洞であったことになるだろう。

**SR011**　SR010の南西側に位置し、SR008・009と主軸をほぼ等しくする。墓坑は2段掘りがなされており、掘方は長さ175cm、幅120140cm程の平面長方形を呈し、深さは30cmを測る。主体部は長さ128cm、幅45cm程の平面長方形を呈し、底面までの深さは45cm。墓坑周囲には多くのピットがあるが、これがSR011と関連するものかは不明。

**SK018**　調査区中央部に位置する。平面は狭長で、小口部が丸みを帯びた隅丸長方形を呈し、長さ165cm、幅40cm、深さ15cmを測る。後述するSK019に似るが、長辺壁面はやや段状をなし、底面幅は狭い。墓とするにはやや躊躇される。

**SK019**　SK018の西側に隣接して存在する。平面長方形を呈し、東側短辺部がやや丸みを帯びる。長さ163cm、幅44cm、深さ17cmを測る。各壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。刀子（図６－１）が出土しており、土坑墓である可能性が高い。

**SK022**　調査区のほぼ中央に存在し、一部をSD020に切られる。おそらく平面隅丸長方形を呈するものであろう。深さは20cm。底面は平坦ではなく、丸みを帯びる。

**SK024**　調査区南側隅に位置する。平面は狭長で、小口部が丸みを帯びた隅丸長方形を呈し、長さ172cm、幅52cm、深さ30cmを測る。各壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。

**SK027**　調査区南西側に位置する。平面長方形を呈し、長さ133cm、幅65cm、深さ25～33cmを測る。他に比べて幅広である。各壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。

（２）甕棺墓（ST）（図４・７～10）

調査区北東側にまとまって８基存在する。第129次調査の状況を考え合わせれば、甕棺墓は北西－南東方向に直線状に配列することが解る。また、この配列は木棺墓とも一部共通していることが興味深い。また甕棺墓それぞれが密集し、切り合い関係を持つことも注目すべきであろう。以下では各甕棺墓や甕棺について、その所見を記す。

**ST002**　ST021上を切り込む小形棺で、主軸はS－30 °－E。削平により上半部を失う。下甕は壷で、合わせ目には白色粘土による目張りを行う。埋置角度は－2 °とほぼ水平。

**甕棺**　上甕は日常土器の甕である。底部を欠損。わずかに内側へ内傾する断面逆「L」字形の口縁部を有する。外器面にはハケ目の痕跡が残る。口径28.0cmを測る。下甕は壷で、断面鋤先状の口縁部を持ち、胴部中央には２条の突帯を巡らす。外器面にはわずかに丹塗の痕跡が残る。口径22.2cm、頸部径19.0cm、器高39.0cmを測る。

**ST003**　SR009上を切り込む小形棺で、主軸はN－78 °－E。削平により上半部を失う。甕棺は瓢形土器の上半を打ち欠いたもので、甕胴部片により蓋をする。埋置角度は27 °。

**甕棺**　瓢形土器の上部を打ち欠いたもので、２条の突帯が残る。器高30.0cmを測る。

**ST004**　調査区北東隅に存在する大形棺で、主軸はS－55 °－E。削平により上甕の一部を失う。上は鉢形、下は甕形で、合わせ目には白色粘土による目張りを行う。埋置角度は33 °。

**甕棺**　上甕は鉢形で、断面逆「L」字形の口縁部を有する。やや内面への張り出しがみられ、端面は平坦。口径62.8cm、器高48.2cmを測る。下甕は甕形で、口縁部は内外両端部が若干張り出しており、断面逆「T」字形を呈している。端面はほぼ平坦。胴部中央には断面三角形の突帯を２条巡らしている。口径29.0cm、器高87.8cmを測る。

**ST005**　ST021の掘方を一部切り込んだ小形棺で、主軸はS－76 °－E。上・下とも甕であるが、下甕は口縁部を打ち欠いている。埋置角度は50 °。

**甕棺**　上甕は日常土器の甕で、土器の下半部分を欠損する。断面「く」字形を呈する口縁部を有する。口径（復元）29.2cmを測る。下甕は口縁部を打ち欠いた日常土器の甕である。器高32.5cmを測る。

**ST006**　ST012の掘方を一部切り込んだ小形棺で、主軸はS－12 °－W。削平により上半部を失う。上・下とも甕。口径が大きく異なり、下甕が大きく、合わせ目には白色粘土による目張りをおこなう。埋置角度は５ °とほぼ水平。

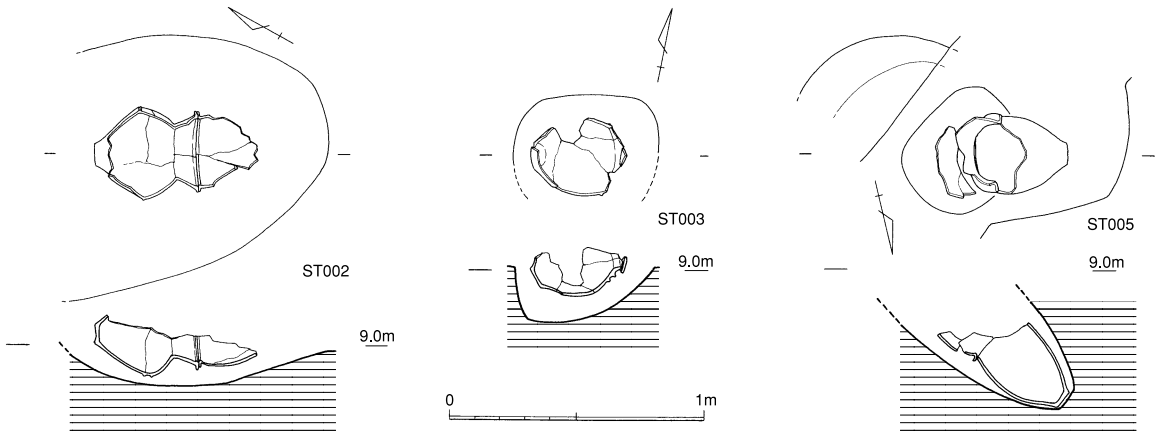



図７　甕棺墓１（1/30）

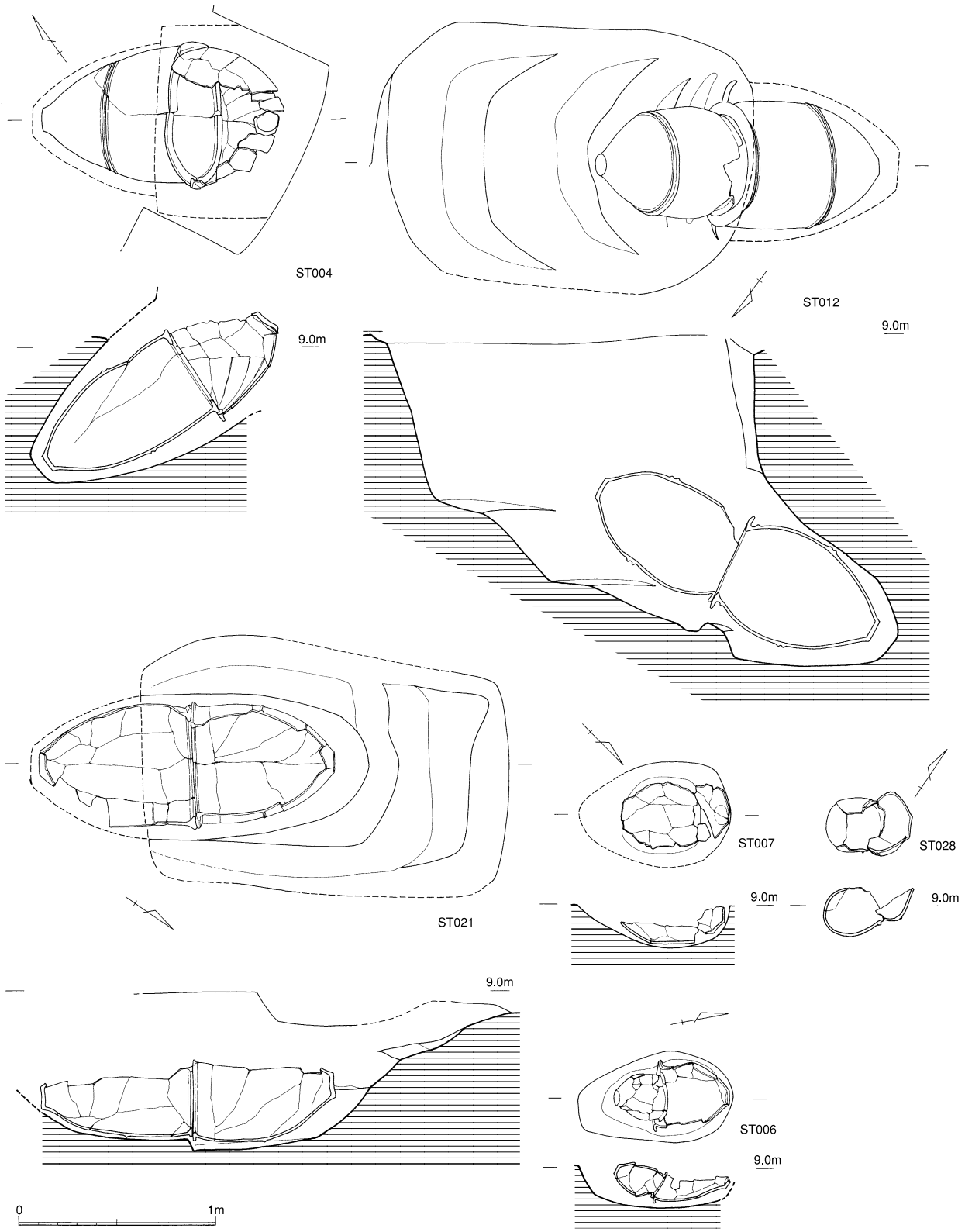

ST004
ST012
9.0m
9.0m
ST021
ST007
ST028
9.0m
9.0m
9.0m
ST006
9.0m
0
1m

図８　甕棺墓２（1/30）

**甕棺**　上甕は日常土器の甕である。口縁部は断面「く」字形に折れ曲がり、大きく外反する。口径（復元）27.4cm、器高26.2cmを測る。下甕も日常土器の甕であるが、器壁が薄くて脆く全形を復元するには至らなかった。口縁部は折れ曲がり、水平方向に大きく外反している。

**ST007**　SR008、そしてST012掘方の一部を切り込む小形棺（単棺）で、主軸はS－45°－E。削平により、底面部分を残すのみ。遺存状況は悪いが、埋置角度は30°程か。

**甕棺**　日常土器の甕である。全形は不明。底部のみ復元でき、底径（復元）10.4cmを測る。

**ST012**　ST021の北西側に存在し、SR010を切り込む大形棺で、主軸はS－52°－W。地表下1.5mと墓坑は深く、甕棺は完存する。上・下とも甕で、合わせ目には白色粘土による目張りを行う。埋置角度は25°。墓坑は隅丸長方形で、深さ60cmほど掘り込んだ後、南西側短辺部に下甕を納めるための横穴を穿つ。横穴は下甕を納めるのに十分な広さを持ち、北東側短辺部から横穴部への緩斜面は階段状の造作を施している。調査担当者は、これが棺埋置および遺体埋葬のための作業段階を示しているものと考えている。下甕口縁部下はちょうど最下の段部分に相当するのだが、口縁部に沿って溝状の掘り込みを行っている。

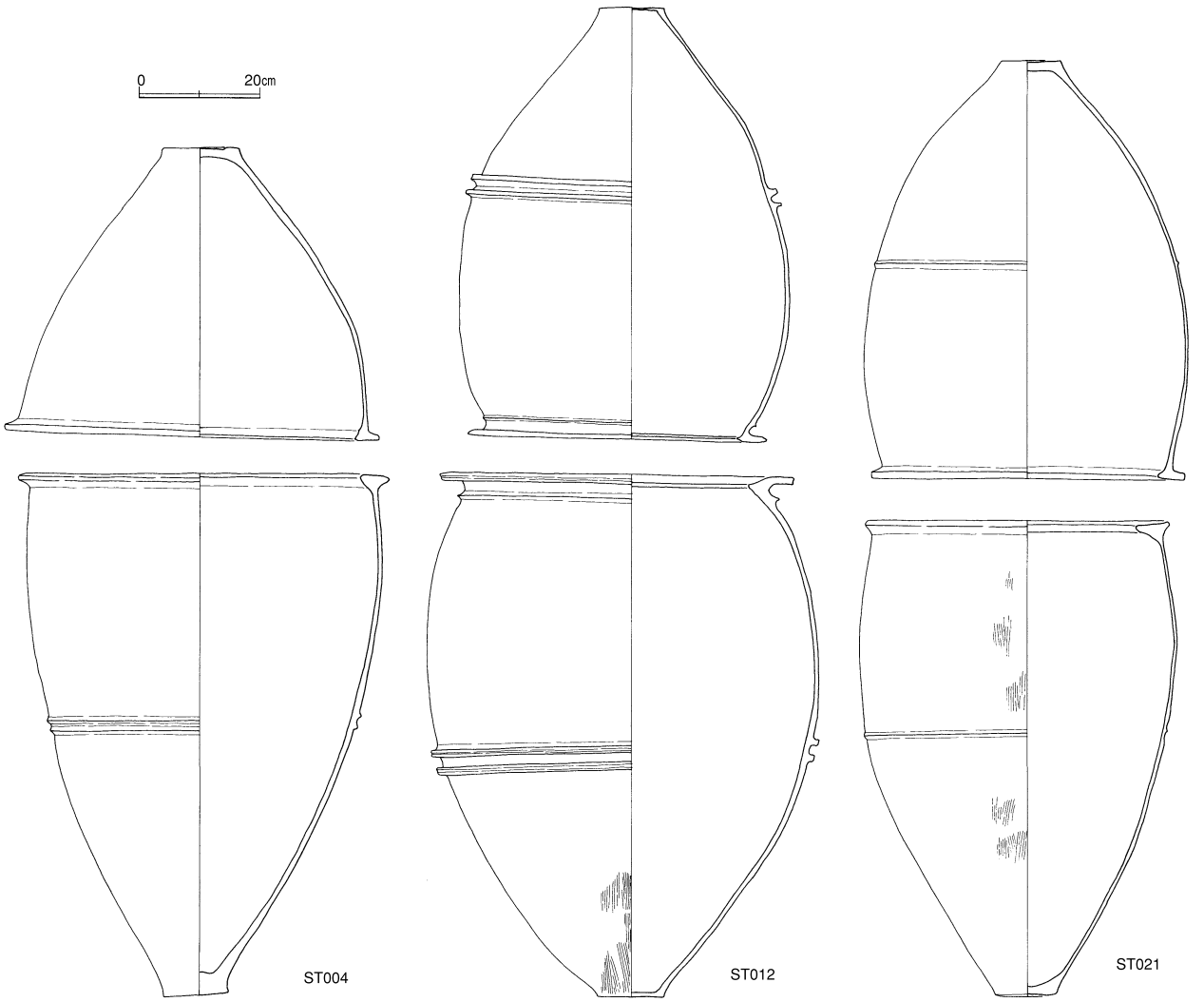



図９　甕棺１（1/12）

また、中段と下甕口縁部下端、上段と口縁部上端の高さはほぼ等しく、下甕を設置し、遺体を納め、上甕をかぶせるという一連の作業の中で、各段部分は作業面として有効に機能したのではないか。また、緩斜面中段部分より上と下では埋土が異なる。前者はローム土の塊を含んだ黒褐色土であるのに対し、後者はローム土主体の褐色土である。埋土にも明確な使い分けがなされている。

甕棺　上甕は甕形で、断面鋤先状の口縁部を有する。口縁部下には断面三角形の突帯を付す。また胴部中央下寄りには断面方形の突帯を２条巡らしている。口縁部付近ですぼまり、全体的に丸みを帯びている。口径50.2cm、器高76.2cmを測る。下甕は甕形で、断面鋤先状の口縁部を有する。口縁部下には断面三角形の突帯を付す。また胴部中央下寄りには断面方形の突帯を２条巡らしている。口縁部付近ですぼまり、全体的に丸みを帯びている。口径59.4cm、器高88.0cmを測る。

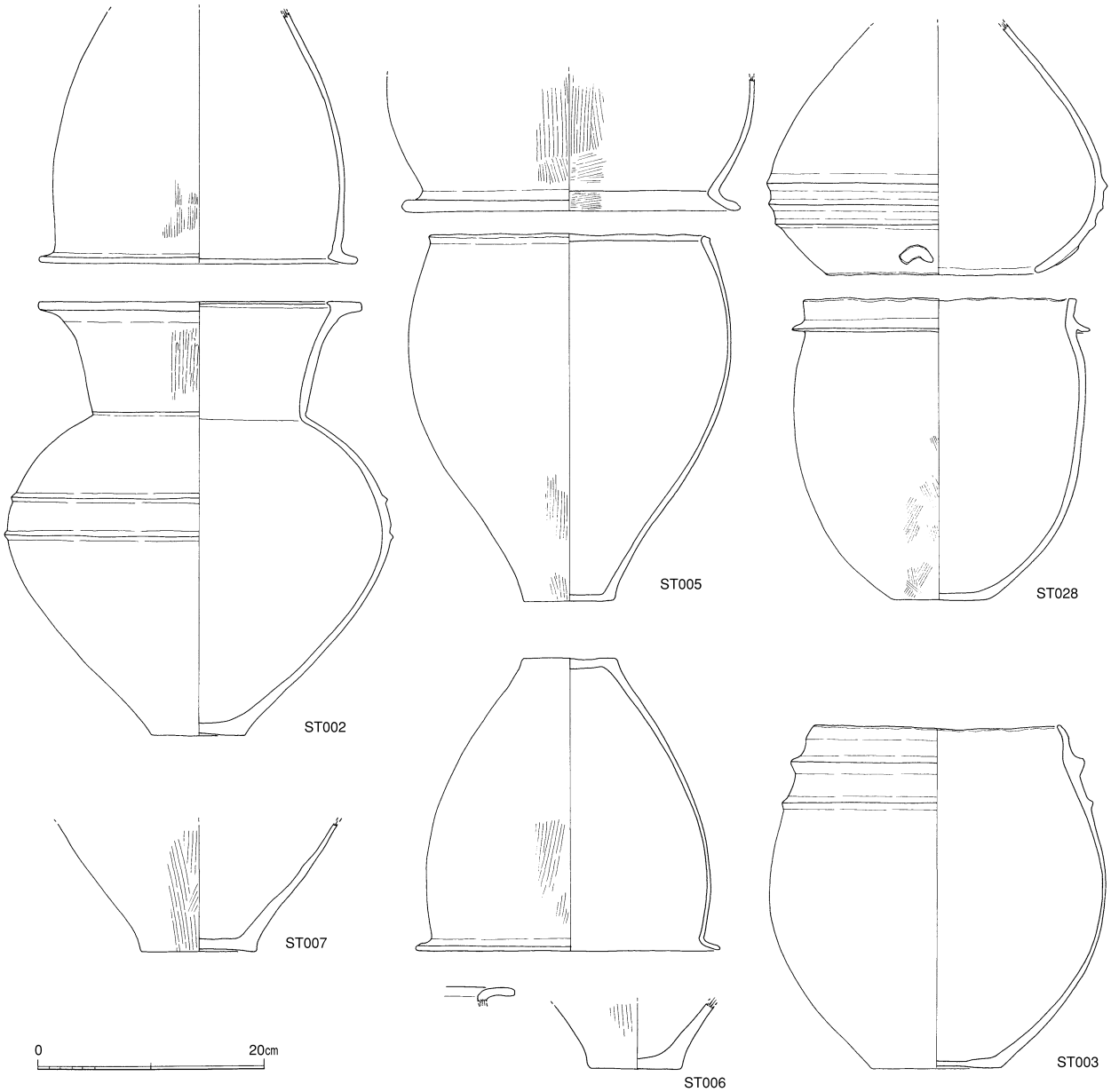



図10　甕棺２（1/6）

**ST021**　甕棺群のほぼ中央に位置する大形棺で、一部SR008・009を切り込む。主軸はN－39 °－Wで、上・下とも甕。合わせ目には白色粘土による目張りを行う。墓坑は平面長方形で、北西側短辺（挿入側）はわずかに階段状をなす。底面は平坦に仕上げた後、甕棺を埋置するため「U」字形に掘削し、下甕を納めるための横穴を穿つ。横穴と甕棺の間はわずか数cmの隙間しかなく、その緻密な造作を窺うことができる。埋置角度は0 °と水平。

**甕棺**　甕は甕形で、断面逆「L」字形の口縁部を有する。やや内面への張り出しがみられ、端面はやや内傾する。胴部中央には断面三角形の低い突帯を１条巡らしている。口縁部付近ですぼまり、全体的にやや丸みを帯びている。口径52.4cm、器高70.4cmを測る。下甕は甕形で、口縁部は内外両端部が若干張り出しており、断面逆「T」字形を呈している。特に内面への突出が顕著である。端面はわずかに内傾する。胴部中央には断面三角形の低い突帯を１条巡らしている。胴部は口縁部付近でわずかに内傾する。口径50.4cm、器高80.2cmを測る。

**ST028**　調査区隅に存在し、ST004を切り込む小形棺で、主軸はN－55 °－W。下甕は瓢形土器、上甕は壷で、いずれも口縁から頸部を打ち欠く。墓坑の形態は不明で、埋置角度は26 °。

**甕棺**　上甕は口頸部を打ち欠いた壷を使用する。底部を欠損。胴部には断面三角形の突帯を３条巡らしている。肩部には粘土塊を「V」字形に貼り付けている。おそらく３方向。下甕は鍔付の甕で、口縁部を打ち欠いている。口径24.6cm、器高27.0cmを測る。

（３）柵列（SA）・溝（SD）（図11・12）

今次調査では、数条の溝や柵列を確認しているが、その多くは第129次調査区にまたがって存在している。本書ではSA001、SD020・023・026について報告を行う。

**SA001**　調査区北東側をN－22 °－W方向にのびるもので、第129次調査区へと続く。幅20～50cm程の溝の中に、径15 ㎝前後の柱穴が密に、そして直線的に続いている。溝の埋土から柱穴ははっきりと確認でき、柱穴は溝の中心ではなく東側へと寄る傾向がある。いくつかの柱穴からは柱痕跡が確認できたが、柱痕は径10cmにも満たない細いもので、やや西側へと傾いたものが多い。柵列と報告しているが、遺構の性格は不明である。遺構の遺存状況は悪く、遺物も弥生土器を中心とした細片で、時期の決め手に欠ける。切り合い関係より確実にいえることは、甕棺墓群よりは新しく後述する溝（SD020）より古いことである。

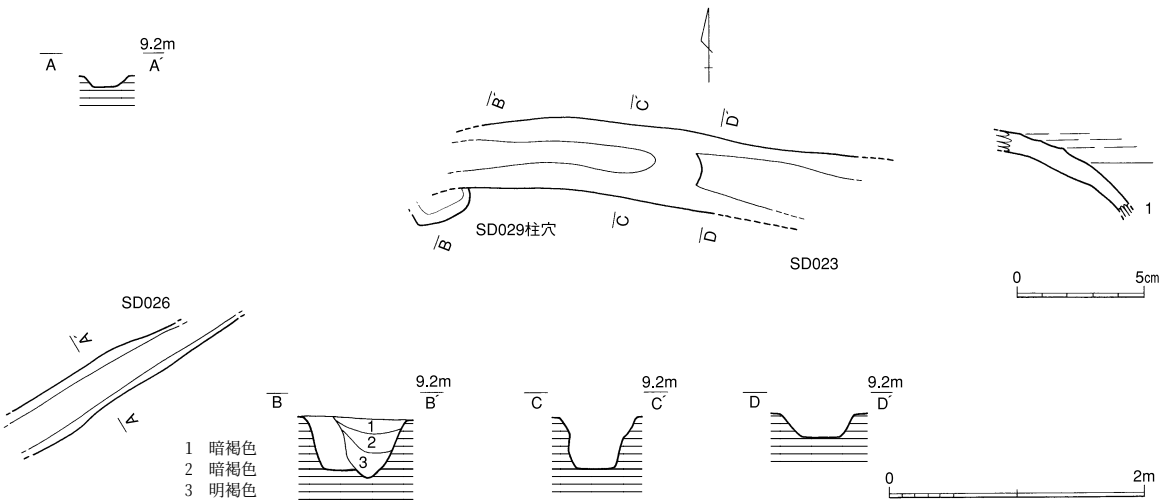



図11　溝023・026（1/60・1/3）

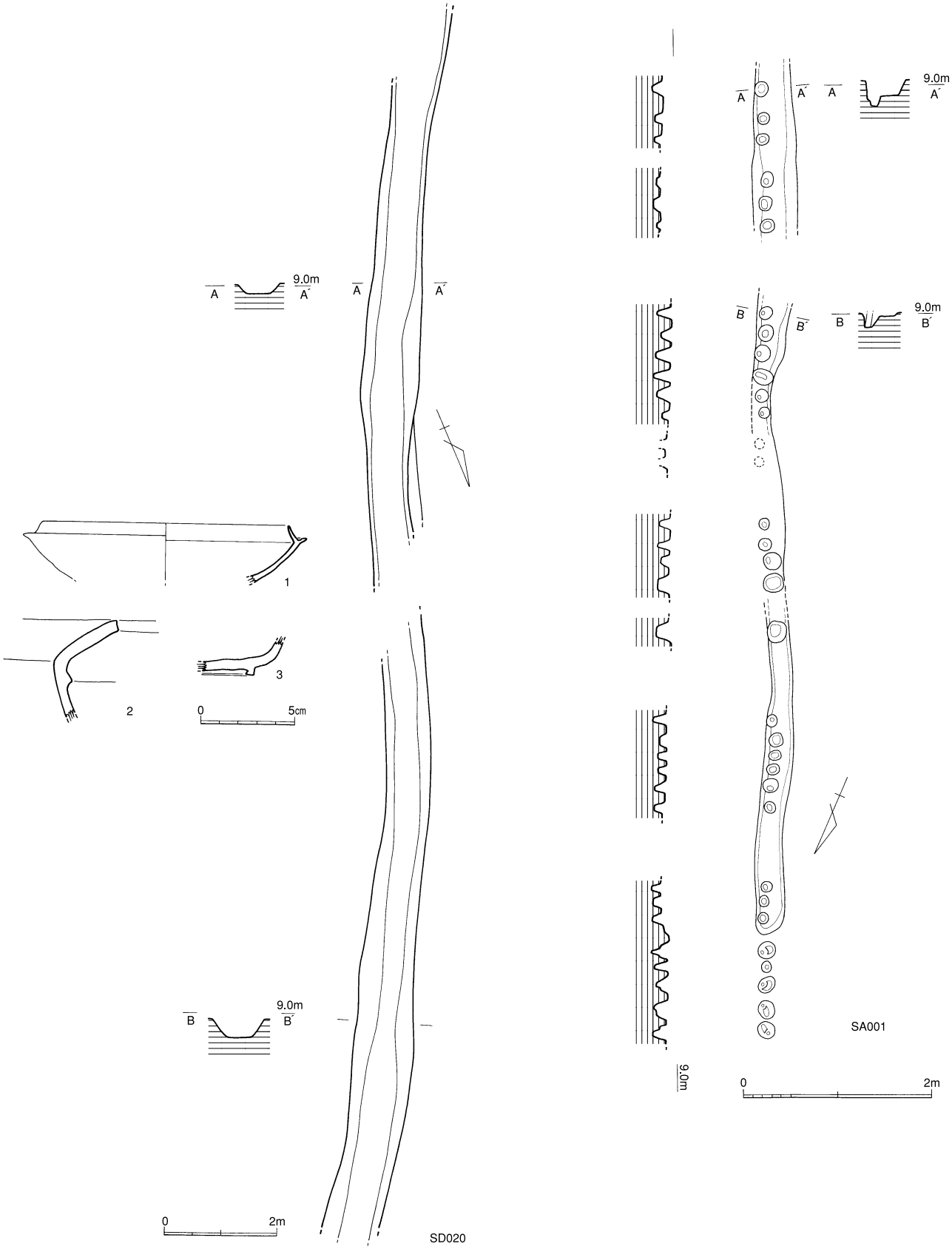



図12　柵列001・溝020（1/100・1/60・1/3）

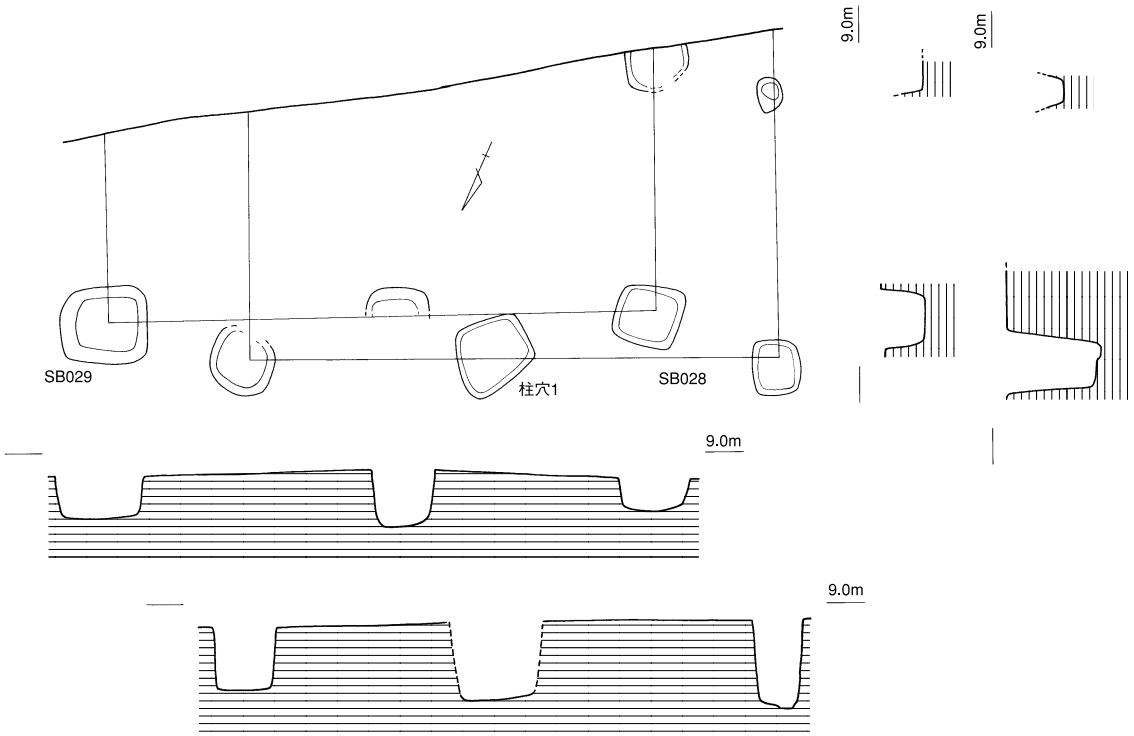



図13　掘立柱建物（1/60）

**SD014**　第129次調査SD213と同じ。詳細は第129次調査報告にて記述する。

**SD020**　調査区南西半をN－25°－Eに走り、第129次調査区へと続く。ほぼ直線的にのびており、断面は逆台形を呈している。幅80～100cm、深さ20～30cmを測る。出土遺物には、弥生土器や古墳時代須恵器等が主である（図12－1・2）が、数点の奈良時代須恵器（図12－3）が出土しており、時期は８世紀後半に比定できるだろう。

**SD023・026**　調査区南側に存在する。SD020に切られているが、SD023とSD026は本来同一の遺構であったと判断している。SB028・029を切り込んでおり、後出する。SD026においては北東方向へ直線的にのびているが、SD023の途中で東方向へ折れ曲がっている。溝の幅は40～60cmで、SD026の方へ向かうにつれて狭くなる。断面は逆台形を呈しているが、その深さはまちまちで、SD023西側では極端に深くなっている。出土遺物には細片が多く、１点のみを図化した。１は古墳時代須恵器蓋杯天井部である。古墳時代後期後半～終末に位置づけることができる。

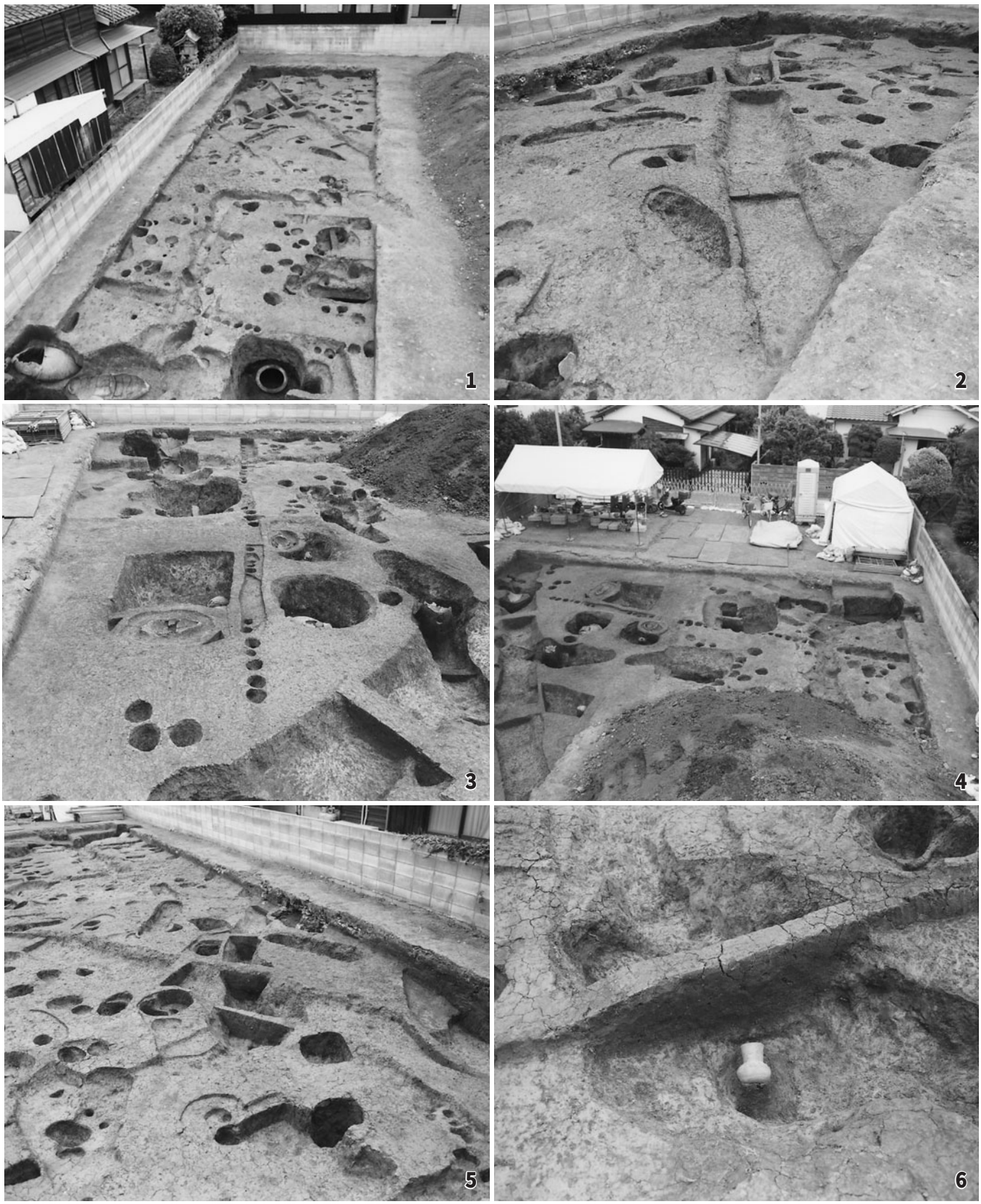
（４）掘立柱建物（SB）（図 13）

２棟を確認した（SB028・029）。ほぼ同規模のもので、柱穴に切り合い関係は無く、わずかに位置を違えるのみである。立て替えによるものかもしれない。

**SB028**　調査区南隅に存在し、北側の２間分、西側の１間分を確認したのみ。２×２間の側柱建物、もしくは総柱建物である可能性が高い。北側の２間は4.2mを測る。

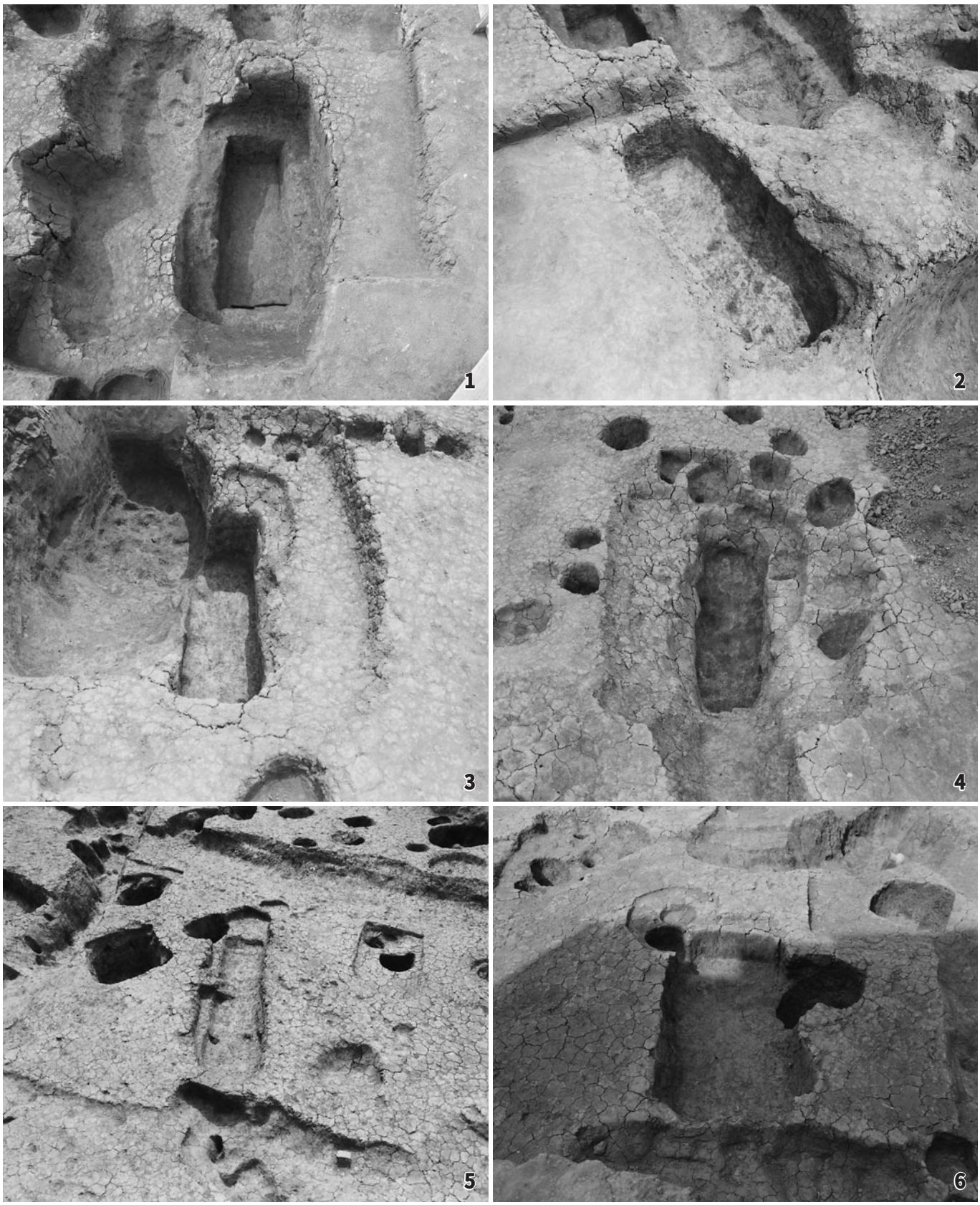
**出土遺物**（図版４－1）１は須恵器直口壷である。ほぼ完形。口頸部はあまり開かず真っ直ぐに立ち上がる。胴部やや上寄りに２条の沈線を巡らす。底部は回転ヘラケズリ。口径8.1cm、頸部径6.9cm、器高13.9cmを測る。柱穴１出土。

**SB029**　SB028より東側へ0.6m程離れた建物で、軸線はSB028に等しい。北側の２間分、西側の１間分を確認したのみであるが、２×２間の側柱建物、もしくは総柱建物である可能性が高い。北側の２間は4.3mを測る。

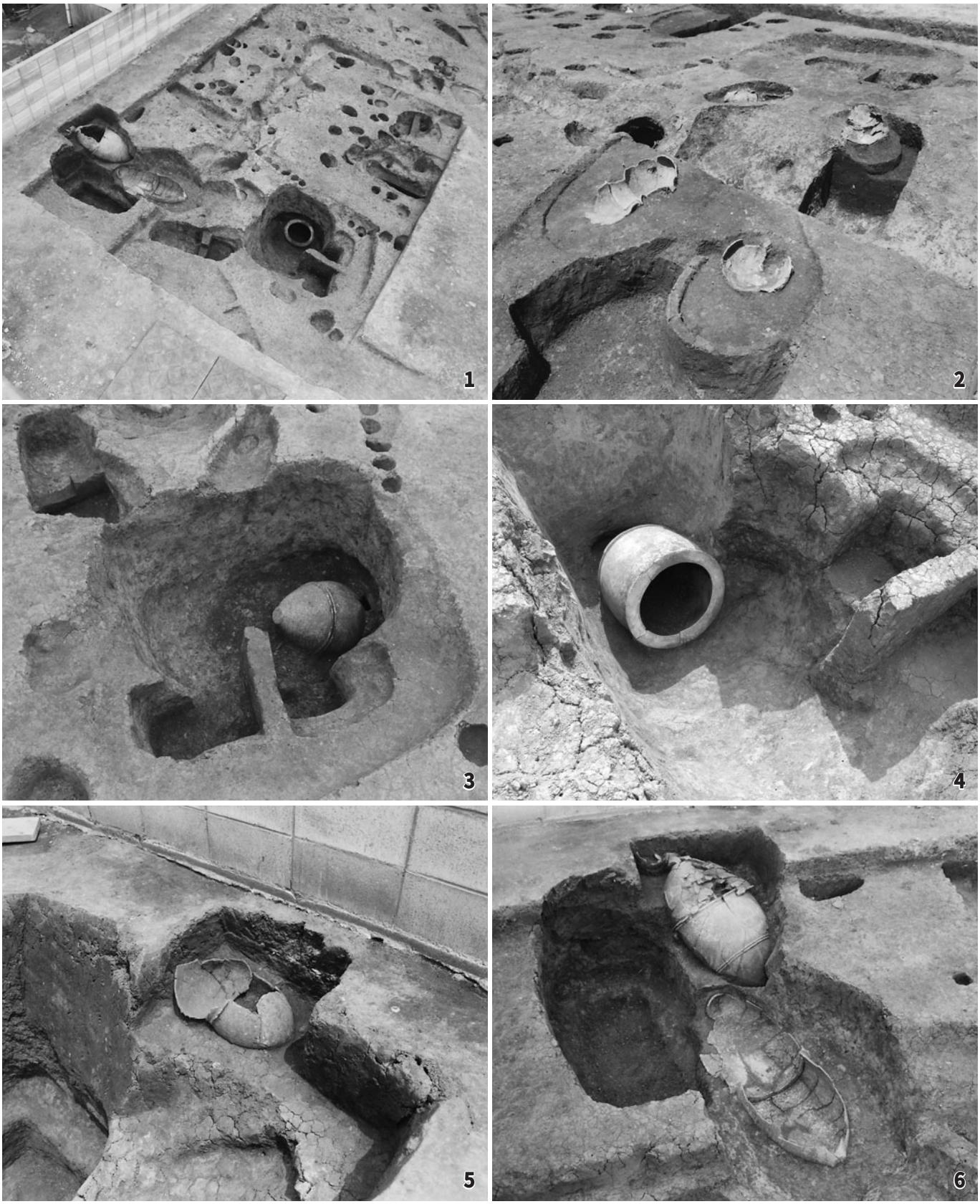



1　全景（北東から）　2　SD020（北から）
3　SA001（北西から）　4　SA001（南西から）
5　SD023（南西から）　6　SB028遺物出土状況（西から）

**図版 2**

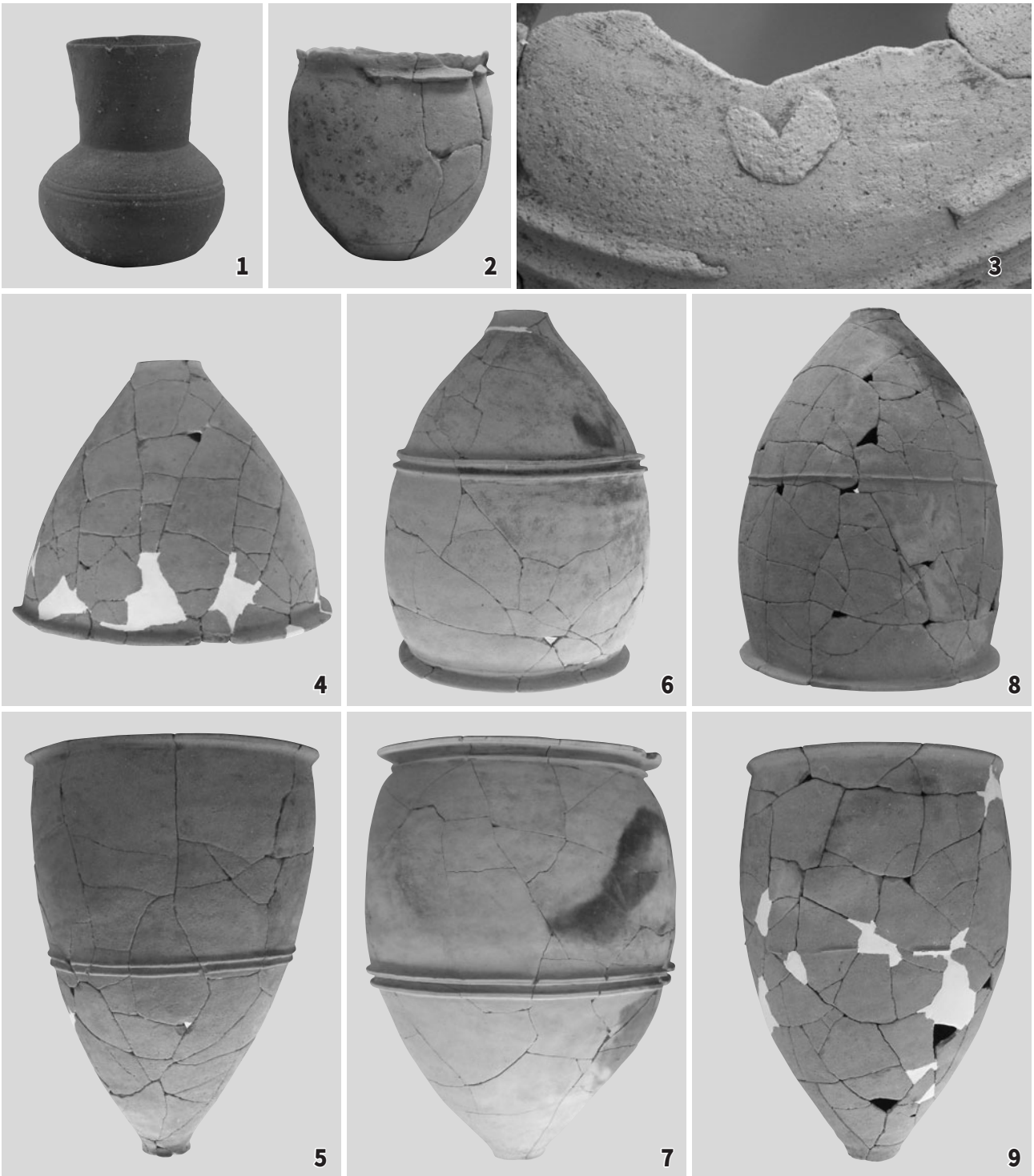



1　SR009（南東から）　2　SR008（北から）
3　SR010（北東から）　4　SR011（北西から）
5　SK019（東から）　6　SK027（南西から）




1　甕棺墓・木棺墓群（北東から）　2　小児棺群（東から）
3　ST012（北から）　4　ST012（東から）
5　ST028（西から）　6　ST004・021（北西から）

**図版 4**




| | |
|---|---|
| 1 | SB028 |
| 2・3 | ST028（図10） |
| 4・5 | ST004（図９） |
| 6・7 | ST012（図９） |
| 8・9 | ST021（図９） |

出土遺物

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | なか |
| 書名 | 那珂61 |
| 副書名 | 第128次調査の記録 |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第1156集 |
| 編著者名 | 藏冨士　寛 |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 |
| 所在地 | 〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神一丁目８番１号 |
| 発行年月日 | 2012年3月16日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東緯<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 那珂遺跡群<br>第126次 | 福岡県福岡市博多区<br>東光寺町一丁目376-1 | 40130 | 0085 | 33°34′27″ | 130°25′56″ | 20100506<br>～<br>20100707 | 114.0 | 共同住宅建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 那珂遺跡群<br>第126次 | 集落・墓 | 弥生時代 | 木棺墓４　甕棺墓９　溝１ | 甕棺　土器 | |
| | 集落・墓 | 古墳時代 | 土坑墓５　掘立柱建物２<br>柵列１　溝１ | 須恵器　鉄器 | |
| | 集落 | 奈良時代 | 溝１ | 須恵器 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 今回の調査では、弥生時代の木棺墓や甕棺墓を良好な状態で確認することができた。これら墓群は北西‐南東方向へ列状に分布しており、近隣の調査においても同様な成果を期待することができるだろう。墓群に平行する溝はこれを区画するものである。柵列については時期、性格共に不明な点が多い。周辺地域における今後の調査の進展に期待したい。 |


那珂61

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第1156集

2012（平成24）年３月16日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
（092）711-4667

印刷　高松印刷有限会社
福岡市東区松島１丁目4―10
（092）611-0573